

農業共済新聞 千葉版 投稿

掲載号	9 月 4 週号	
筆者	所属	千葉県農林総合研究センター
	職名及び氏名	研究員 町田剛史
題名	食欲の秋に出荷 小玉スイカの抑制栽培	
備考	【表説明】 図1 10月どり小玉スイカの栽培暦 写真1 猛暑下の定植に適した苗	

【本文】

スイカといえば夏の代名詞ですが、空気が乾燥した秋に食べても意外なほどおいしいものです。秋のスイカについて試食を兼ねて消費者アンケートを取ったところ、夏にかぶりつくのとは異なり、少量の高級イメージで食味の良いものを望んでいる、という回答が得られました。そこで、果肉質が飛躍的に向上している小玉スイカを使った10月どりのハウス抑制栽培技術の開発を行いました。

10月どりでは播種・定植が7～8月の猛暑期に当たるため、育苗から定植直後の高温障害を防ぐことが課題です。ポリポット苗を本葉4～5枚で定植すると、定植直後に萎れ、葉やけを起こしてしまいます。対策として、ココヤシ繊維等を固化したセルトレイ「プラントプラグ」を用い、播種から7日後の子葉展開時に定植すれば、萎れにくく、活着とその後の生育も良好です（写真1）。たった7日間の育苗は省力的で、春作では不可欠の接ぎ木や温床管理もいりません。また、土壌の乾燥防止にマルチは必須ですが、地温上昇を抑える必要があります。白黒マルチを用いるか、緑色マルチ等に消石灰を散布して地温上昇を抑えます。

品種は、高温期でも果肉質の優れる「姫甘泉5号」、「ひとりじめHM」等が適しています。定植後には、本葉4～5枚で親づるを摘心し、子づる4本を伸ばします。株当たりの着果数は2ないし3果とし、3果では4番雌花に着果させる方が肥大が優れます。

秋のスイカには、いわゆるウラナリのイメージがあるという意見を聞くこともあります。しかし、実際に食べると、消費者だけでなくスイカ生産者にも非常に好評です。スプーンですくっていただく高級イメージで売り込むといった工夫で、新しい需要が開拓されることを期待しています。

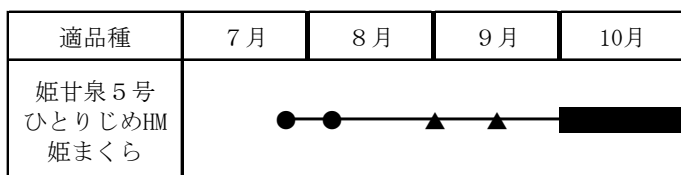


図1 10月どり小玉スイカの栽培暦

●:播種・定植 ▲:授粉 ■:収穫

